

## なぜおかしは食べるとなくなるのか

京都大学経済学部 8 回生 山本翼



「おかし牧場」より

### はじめに

この文章は「なぜおかしは食べるとなくなるのか」について考える文章です。が、最初に注意しておきたいことがあります。まず、あんまり学術的に高度な内容は期待しないでください。実は一回このテーマで論文を書こうとして挫折していて、トラウマスイッチになるぐらいならどこかで供養しようと思ってこの文章を書いているのです。っていうかまあ肩書き見ればわかると思うけどそんなに優秀な学生じゃないんです。経済学部によくいる感じのイケイケな大学生にコンプレックスを抱き続けてここまで来てしまったのです。あと、前述の通り論文として書こうとしていたのもあってあんまりドラえもん関係ないかもしれません。これはそういう振り切った文章があってもいいなっていう好みの問題かも。まあ要するに、期待値低めで気楽に読んでねって感じです。何でも許せる人向けってやつです。

それと、この文章を書くにあたって、友達からF同の後輩、哲学の講義の担当教授まで、いろいろな人にコメントをもらいました。すべてを活かしきれているわけではありませんが彼らの協力なしにはこの文章は完成しませんでした。ここに謝意を示します。

### 目的

さて、なぜ「なぜおかしは食べるとなくなるのか」という問いなのかですが、冒頭に載せたコマの「なぜおかしは食べるとなくなるのだ!!」から来ています。これは『ドラえもん』のてんとう虫コミックス 24 巻収録の「おかし牧場」という話の冒頭部分で、チョコレートを手に入れたのび太が発した問いです。子供の頃これを読んだ僕は大笑いしてまし

た。当たり前のごとに一生懸命疑問を呈するのび太と針吹き出しの陰に隠れるドラえもん。今見ても面白いですね。でもそのうち僕は疑問に思い始めました。確かに、なんでおかしくて食べたらなくなるんだろう……？

というわけで、この文章の目的は「なぜおかしは食べるとなくなるのだ!!」に対する返答を考えることにあります。ちなみに、作中のドラえもんの返答は「ずいぶんあたりまえのことをいっしょうけんめいしゃべるんだね、きみは」です。そりゃそうだ。でもそれに答えてのび太は言います、「だってつくづく思うんだもの」。そうなんです、つくづく思うんです。一つぶごとにジーンと心にしみるような、何十万円もするようなおかしだって、食べたらなくなるわけです。まあ食べたらなくなるのがおかしだから、と自分に言い聞かせて生きているわけですが、私たちは常にこの問いに晒されているということでもあります。もう少しこの問いについて考えてみたいと思います。

## 問いの検討

でも「なぜおかしは食べるとなくなるのか」という問いは、答えてみようとするとな案外難しい気がします。っていうか前述のように僕は挫折しました。そもそもこの問い、疑問詞疑問文のように見えますが実際に表されているのはただの悲嘆だともいえます。もうおかしを食べることによって得られる快樂を再び手にすることは出来ない、その悲しみを表現しているだけだと考えることもできるのです。じゃあもう少し問いを変えちゃおうか、ということで周辺の問いの形に変えることにします。なんかズルい気もするけど。

ここで例えば、「おかしはなぜあるのか?」という問いが考えられます。なぜ何もないのではなくものがあるのか、パルメニデスの問いてやつです。でも正直これに答えるのは無理です。それが出来たら哲学史に名前が残るレベルじゃないかと。日本語に訳されている「なぜ何もないのではなく、ものがあるのか?」っていうノージックの書いた文章があるんですけど冒頭で「この問題には答えることができないように思える」って言ってます<sup>1</sup>。まあこの問いに興味がある人は取り敢えず Wikipedia とか見たらいいと思います。

別の問いとして、そもそも「食べたらおかしはなくなるのか?」という問いも考えられます。この文章ではこの問いについて、『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』という本の第2章「ドーナツとは家である」を参考に考えてみたいと思います。

## 食べたらおかしはなくなるのか

『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問——穴からのぞく大学講義』は、大阪大学の教員を中心に寄稿されたドーナツやドーナツの穴に関するさまざまな文章が集められている本であり、第2章「ドーナツとは家である——美学の視点から「ドーナツの

---

<sup>1</sup> ロバート・ノージック[著]、戸田山和久[訳] (1997)、「なぜ何もないのではなく、ものがあるのか?」(坂本百大ほか訳『考えることを、考える <上>』青土社、第二章)、p.171

穴」を覗く試み」は美学を専門とする田中均さんの文章です。ここでは「ドーナツの穴は無くならない、なぜならドーナツは食べても無くならないからだ」と結論付けられています<sup>2</sup>。この文章で紹介されているのはプラトンの「寝椅子の比喩」とハイデガーの『芸術作品の根源』なのですが(僕は二つとも知りませんでしたが詳しく説明するのはめんどくさいので自分で調べてください)、その二つを例に挙げてドーナツに置き換えて考えた後で、「芸術は見かけをまねするに過ぎないと批判するプラトンにせよ、芸術こそが真理を表すと考えるハイデガーにせよ、彼らが〈ドーナツそのもの〉として考えるものとは、食べれば無くなる現実のドーナツではなく、食べられないドーナツである<sup>3</sup>」としているのです。この例においてドーナツをおかしに置き換えれば、〈おかしそのもの〉も食べるできないものである、といえるのではないのでしょうか。つまり、おかしについては「本質が実存に先立つ」のではないか、ということです。「おかしは食べてもなくなる」と言われたら直感と違うと思いきや、「おかしの本質というものは食べることができない」と言われればまあそうかもなって感じだと思います。

というわけで、「なぜおかしは食べるとなくなるのか」に対しては「おかしは食べてもなくなる」んだよ！ って言いたいところなのですが、それでは納得してもらえなさそうな気がします。「確かにおかしの本質は食べてなくなるものじゃないけど現実のおかしは食べたらなくなるんだよ」って言われそうです。実際、「ドーナツとは家である」においても、先述の結論の後に現実の食べたらなくなるドーナツについての話になります。ですが、それはつまり、おかしの定義において「食べたらなくなる」のが重要な要素である、ということなんじゃないのでしょうか。ということで、おかしの定義についても少し考えなきゃいけなさそうです。

### 「おかし」の定義

まあ「なぜおかしは食べるとなくなるのか」を考える前にきちんと語句を定義しておけばよって話な気もしますが、前節で辿り着いた「おかしの定義において食べたらなくなるのが重要な要素である」というのが大事になってきます。そもそもおかしを厳密に定義するのは難しいです。パンはおかしではなくて主食かもしれない、けどそしたら「菓子パン」って何？ とか、僕は時期によってフルグラとかきなこねじりとかを主食にしてたけど今は主食にしてないからおかしなのか？ とか。少なくとも「主食/おかし」という単純な二分法では説明できなさそうなのでスペクトラム的に考えたほうが良さそう。あとは、何回食べたらおかしでなくなるのか？ とか。これもソリテス・パラドックス(これについては Stanford Encyclopedia of Philosophy あたりを参照)みたいな話でそんなに簡単に答えを

<sup>2</sup> 大阪大学ショセキカプロジェクト[編](2014)、『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問——穴からのぞく大学講義』大阪大学出版会、p.38

<sup>3</sup> 同上、pp.47-48

出せるものでもない気がします。っていうかおかし牧草を食べたおかしとかその子供っておかしなのか？ ……まあとにかく、「食べたらなくなるのを重視している」っていうのが大事です。それはつまり、おかしをどのように定義するにせよ、「おかしは食べたらなくなる」というある種の性質を前提に置いているといえないだろうか、ってことです。

というわけで、「おかしの定義」なんて節を設けておきながら特に定義しなかったけど、「なぜおかしは食べるとなくなるのか」という議論は「おかしは食べたらなくなる」ということを前提にしている、という当たり前のような結論に遠回りして辿り着いたのです。

### 食べたらなくなるのがおかしだからおかしは食べるとなくなる

なんかダラダラとよくわからない思考を続けてたら「食べたらなくなるのがおかしだからおかしは食べるとなくなる」という当然の結論になりました。なんかこの手の誤謬めいた言説にはいろんな呼び名がある気がしてなんて呼べばいいかわかりません。トートロジー、論点先取、循環論法、検索してたらなんか胡散臭い(偏見)ビジネス指南みたいなやつが出てきました。なんにせよ誤謬めいた結論になってしまったのでこんなんでもええんかって感じですね。

ここでドーナツの穴関連で借りていたもう一冊の書籍である『失われたドーナツの穴を求めて』という本を援用(になるのかわからないけど)しましょう。この本はドーナツの穴についての文章が南山大学の教員を中心に寄稿されている本なのですが、哲学者の奥田太郎さんが「ドーナツの穴だけ残して食べることはできるのか」という問いに対してできないというある意味当然の結論に哲学的議論を通じて辿り着いた後の言説を引用したいと思います。

哲学といえば、誰も考えつかなかったような深遠な答えを秘技的に探り当てる営みだと思われがちなのだが、それはやや偏ったイメージだろう。実は、当たり前のことを当たり前のままに言葉を尽くして的確に捉えることもまた、哲学がなす重要な仕事のひとつなのである。<sup>4</sup>

### 結論

ということで、長々と書きましたが、「なぜおかしは食べるとなくなるのだ!!」に対する返答としての結論はこうです、「ずいぶんあたりまえのことをいっしょうけんめいしゃべるんだね、きみは」。

### 参考文献

---

<sup>4</sup> 芝垣亮介・奥田太郎[編](2017)、『失われたドーナツの穴を求めて』さいはて社、pp.206-207

藤子・F・不二雄(1982)、「おかし牧場」(てんとう虫コミックス『ドラえもん』24巻所収)  
小学館

ロバート・ノージック[著]、戸田山和久[訳](1997)、「なぜ何もないのではなく、ものがあるのか？」(坂本百大ほか訳『考えることを、考えるく上』第二章)青土社

大阪大学ショセキカプロジェクト[編](2014)、『ドーナツを穴だけ残して食べる方法 越境する学問——穴からのぞく大学講義』大阪大学出版会

芝垣亮介・奥田太郎[編](2017)、『失われたドーナツの穴を求めて』さいはて社